

九天玄女考

——通俗小説における女神像——

一

「九天玄女」は中國古代における黃帝と蚩尤の鬪争を彩る神格の一つでもあるが、その名をより高からしめてゐるのは、明の小説『水滸傳』に由るところ多大であるにちがいない。その第三十九回から第四十二回にかけての情節に注目してみよう。江州の潯陽樓で興に乗じて書き附けた詩が原因となつて、無爲軍（江州の町の名）の黃文炳に追われることになつた及時雨宋江は、晁蓋らに救出され、黃文炳を殺害して怨みを晴らすと、濟州鄆城縣に住まう父と弟を梁山泊に引き取るべく單身で家路を急ぐ。しかし、ようやく鄆城縣に歸り着いたものの、警戒の厳しさに還道村の古い廟に身を隠す。追つ手の趙能・趙得らの厳しい捜査にあつて、危機一髪、廟神の加護に

堀 誠

よつて事なきを得る。その不思議な救済のみか、廟神の歡待をうけ、かつ縦五寸・横三寸・厚さ三寸の天書三卷と天言四句を授かり、童女に送られて石橋の下に戯れる二匹の龍に見入る。そこを不意に突き落とされる、と見て、醒めれば一場の夢。手には棗の實が三つ、袖には天書、殿宇の古びた額には「玄女之廟」の金文字。かくて九天玄女なる廟神の夢中の救済を合點し、廟宇の改修を約する。

神女との夢幻的な出會いと救済は、好漢の任侠の世界にあつて神靈の加護という神祕的な色彩を帯びて特異である。ただ、宋江が九天玄女によつて危難を救われ天書を授かる情節自体は、『水滸傳』の濫本的な意味をもつ『大宋宣和遺事』に早くも定着していたことが確認されることを指摘しておかなければならない。

是時鄆城縣官司得知、帖巡檢王成統領大兵弓手、前去宋公莊上捉宋江。爭奈宋江已走在屋後九天玄女廟裏躲了。那王成跟捕不獲、只將宋江的父親拿去。宋江見官兵已退、走出廟來、拜謝玄女娘娘、則見香案上一聲響亮、打一看時、有一卷文書在上。宋江纔展開看了、認得是箇天書、又寫著三十六箇姓名、又題著四句道……

『大宋宣和遺事』では、宋江は宋公莊の屋敷裏の九天玄女廟にそのやしろと承知の上で身を隠したのであり、閻雲に逃げ込んだのではない。しかも危難を逃れ得ると拜謝し、音もろともに天書を授かる。こうした展開の定着を見ると、『大宋宣和遺事』の情節は、九天玄女が確かにある土地で祭祀され、現實に崇拜されていてこそそのそれであるにちがいない。ある個人や一族などがこぞってその加護を祈念した守護神的な神格であったと考えられる。

『水滸傳』の宋江と九天玄女なる女神との結びつきは、情節の生成の面でも古い時代にさかのぼると同時に、九天玄女なる女神の信仰面も推量されたが、さらに『水滸傳』においては、九天玄女のことが後續の章回にもさまざまに現れる。第五十二回、高唐州の高廉との戦いで妖術を打破すべく天書第三卷に載る「回風返火破陣法」で對するものの、宋江の人馬

は結局大敗を喫したのをはじめ、第八十一・八十二・八十五・八十六回到「九天玄女課」なる占いが行われるし、第八十八回には、宋江が遼の兀顔統軍に混天象なる陣形を布かれて難澁する折、夢に九天玄女が打開の方策を傳授する一節も認められる。また第一百十七回(第九十七回)、方臘征伐に際して敵の靈應天師、包道乙が呪文を唱えるや「回風破暗密呪」で對應して打ち倒し、第一百十九回(第九十九回)には、宋江が九天玄女の廟宇を重建するとの情節が用意されていることが確認される。まさに九天玄女が宋江の守護神となるのに始まり、その有り難い加護に對する報謝の情節にいたる周到な展開が用意されているといえる。このことは『水滸傳』が物語全體の結構の面で、首尾一貫した緊密性を確保しようとした證左と認められる。

二

この九天玄女なる女神はいかなる來歴をもつ神格であったのか。中國古代神話を飾る軒轅黃帝と蚩尤との鬭爭説話において、連敗する黃帝に術を授けたのが、この神女である。歴代の史書の「藝文志」や「經籍志」に九天玄女あるいは玄女の名を冠した書が少なからず著録され、その中に兵書に分類

された諸書を見出せることも加えねばならない。^①

『隋書』卷三十四「經籍志」子部兵書

・『玄女戰法』一卷

・『黃帝問玄女兵法』四卷、梁三卷

『舊唐書』卷四十七「經籍志」兵書部

・『黃帝問玄女法』三卷（玄女撰）

『新唐書』卷五十八「藝文志」丙部子錄

・『黃帝問玄女法』三卷

『宋史』卷二百七「藝文志」兵書類

・『玄女厭陣法』一卷

・『九天玄女孤虛法』一卷

・『玄女遁甲經』三卷

九天玄女がいわゆる兵法と淺からぬ因縁をもつことは、九天玄女の來歴および右の諸書のネーミング等に推測がつく。^②その中で『黃帝問玄女法』は、複数の史書に著録され、『太平御覽』卷五百二十六「儀禮部祭壇下」には『黃帝問玄女兵法』が引用される。その他、『太平御覽』には、書名の類似する次の二書の逸文も見える。

・『黃帝玄女戰法』(卷十五「天部霧」)

・『黃帝玄女兵法』(卷八十二「皇王部夏帝禹」)

その『黃帝玄女戰法』を引用した「霧」の一條は、黃帝が玄女から兵法を授かった經緯を端的に示している。

黃帝玄女戰法曰、黃帝與蚩尤九戰九不勝、黃帝歸於太山、三日三夜霧、冥有一婦人、人首鳥形。黃帝稽首再拜、伏不敢起、婦人曰、吾玄女也。子欲何問。黃帝曰、小子欲萬戰萬勝。遂得戰法焉。

蚩尤と戦い、連戦連敗の黃帝。太山に歸して三日三晩にわたって霧に包まれる中、黃帝のもとに現れて一人の婦人こそ玄女にほかならず、その求めに應じて戦法を傳授したというのである。^③注目すべきは、玄女は「人首鳥形」の異形の女神であるという點である。代表的な女神西王母も、古くはその状は人のごとくも豹尾虎齒、蓬髮戴勝の姿容であった。^④ここに霧に包み込まれるいわれ等は知られないけれども、黃帝と蚩尤との戦いに關しては、『史記』卷一「五帝本紀」に神農氏の世が衰え、蚩尤が最も暴虐となって亂を起し、黃帝が諸侯を率いて涿鹿の野に戦つて、遂に蚩尤を禽殺し、諸侯が軒轅黃帝を尊んで天子となして神農氏に代わらせたことを記述する。^⑤ここには黃帝が玄女に兵法を求めた理由は詳らかとならないが、後世、唐・杜光庭『墉城集仙錄』(『太平廣記』卷五十六「女仙一」「西王母」にも「出『集仙錄』として所引)には、

次のような記載が見られる。

黄帝が蚩尤の暴虐を討伐するけれども、その威力では拘禁できない。蚩尤は變幻多端で、風を徴し雨を召し、煙もや霧を噴出して、黄帝の軍兵は大いに迷亂する。黄帝は太山のふもとに歸って休息をとり、憂いを抱いて寝につくと、西王母は玄狐の裘を着た使者を遣わし、符を授けていうには、「太一が前に在り、天一が後に在る。これを得れば勝たん」と。符は幅三寸、長さ一尺で、玉のごとく青くかがやき、丹血で文字を書いてある。符を身に佩すると、西王母は一人の人首鳥身の婦人に命じて、三宮五意陰陽の略、太一通甲六壬步斗の術、陰符の機、靈寶五符五勝の文を授けるが、これに際して婦人が帝に、「我は九天玄女なり」と明かしている。かくして蚩尤に中冀で克った。

黄帝の軍陣の迷亂の原因が分かるとともに、玄狐の裘を着た使者に續いて、黄帝に要訣を授けるべく遣わされたのが九天玄女であったとする。さらに、これに類する記載内容は、北宋の眞宗朝に編纂された道藏「大宋天宮寶藏」（現存せず）の主任編集者張君房がその精要をとって編んだという『雲笈七籤』の卷百所載の「軒轅本紀」、ならびに卷百十四所載の「九天玄女傳」によっても経緯が明らかになる。

九天玄女考（堀）

先に「軒轅本紀」の概要を記せば、黄帝が蚩尤と涿鹿の野に戦ったとき、黄帝は蚩尤に齒がたたず、蚩尤が三日にわたって濃霧を起こしたため、黄帝の軍は迷亂した。風后が北斗星を基準にして指南車を作り、黄帝はいまだ勝利をおさめぬまま太山（泰山）のふもとに歸した。黄帝は陣營の中で、西王母が遣わした玄狐の衣を着た道人から符を授かる夢を見る。ここに黄帝が壇を設けて稽首再拜して祈ると、果たして幅三寸、長さ一尺で青色の、血で文字を書いた符を得た。この符を佩していまだ戦勝できぬ次第を天に嘆ずると、三晝夜も濃霧が續いたあと、天は人首鳥形の婦人を地上に降下させる。この婦人こそ九天玄女であり、黄帝から蚩尤に萬戰萬勝することを願われて、かくて三官祕略五音權謀陰陽の術と陰符經三百言とを傳授する。黄帝これを観ること十旬、蚩尤を征服するに際して雲寶五符眞文と兵信符を授けられ、遂に蚩尤を滅ぼした。

「軒轅本紀」に、黄帝が玄女に戦術などを授けられて蚩尤に戦勝するにいたる経緯を仔細に書いている。濃霧のいわれも明白になると同時に、九天玄女の姿は「人首鳥形」で、先の『太平御覽』や『墉城集仙錄』の記載と同様であった。以上に加えて、卷百十四の「九天玄女傳」には、風后の作ったいわ

ゆる「指南車」をも含めて、ほぼ同様の記載が見える。⁶⁾

煩を厭わず大略を記してみれば、黃帝が蚩尤と涿鹿の野に戦ってまだ勝たざるうちに、蚩尤が三日にわたって濃霧を起こしたので、黃帝の軍はみな迷ってしまった。風后が北斗星を基準にして大車を作り、杓で南を指して四方を正したので、黃帝は太山のおもとに歸すことができた。黃帝が憂憤して過ごしていると、西王母が玄狐の裘を身につけた使者を遣わして符を授けた。黃帝が精思して天に告すること數日、濃霧がたちこめて晝なお暗いとき、九色彩翠の衣をまとった九天玄女が丹鳳に乗り景雲を御して降下して、吾は太上の教を用いるから、問い尋ねよ、という。黃帝が稽首して蚩尤の横暴を告げ、萬戰萬勝の術を求めれば、九天玄女はすぐさま甲六壬兵信の符などの諸書・諸兵具を授ける。黃帝が諸侯を率いて再び戦い、遂に蚩尤を滅ぼすことができた。

上記三傳においては、微妙な差異はあるものの、基本的には、西王母による玄狐の裘を着た者とこれに續く九天玄女の差遣という展開の點で重複する。また出現した九天玄女の姿については、「黃帝玄女戰法」(『太平御覽』所引)と『墟城集仙錄』と「軒轅本紀」とが「人首鳥形」「人首鳥身」の記載をもって玄女の形姿としていたが、「九天玄女傳」はこのことを

記さず、ただ九色彩翠の衣服をまとい丹鳳に乗って景雲を御すと書かれているという異同がある。異形の九天玄女像に對して、「九天玄女傳」では人間的な形象化が進んだものか。

九天玄女は『雲笈七籤』にその傳が收載されることから、少なくとも北宋の眞宗朝には道教系の神々の列に竝んでいたものであろう。「軒轅本紀」の注記には、明の小説『西遊記』や『封神演義』に「托塔李天王」として登場する唐の將軍である李靖(五七―六四九)が玄女の法を用いたと見える。宮崎市定『水滸傳―虚構のなかの史實―』第八章「張天師と羅眞人」の「九天玄女」の項には、『雲笈七籤』の「九天玄女傳」「軒轅本紀」、あるいは唐末の軍閥、高駢が玄女の祕法を使ったこと、五代の羅隱の詩に九天玄女と后土夫人が併稱されること、五代後唐の明宗に仕えた楊勳なる人物が九天玄女と后土夫人を自由に招いて靈力を借りられると吹聴して世を惑わしたことを挙げつつ、宋江個人の守り神となる九天玄女は、その「名はまともな古典には出てこない所を見ると、早くても漢代に起り、唐代の頃になってから道教に取り入れられた地方的な土俗神であつたろうと思われる。」と指摘し、唐五代の頃に信仰が盛んであつたことをも記している。先の『大宋宣和遺事』の記載や著録された兵法書類の書名・佚文等も、往

時の九天玄女像あるいは信仰の様相を探究する上での資料となる。¹⁰ 思うに、九天玄女が黄帝に傳授した戦法の要訣は、絶對の至寶として相傳尊崇されると同時に、九天玄女の神格は戰術神あるいは應驗ある神秘的な女神として守護神の性格を有した。やがて往昔の黄帝への兵法傳授の再現を思わせる宋江への守護の情節も定着を見たと考えられる。

三

ところで、『吳越春秋』卷六に、吳王夫差に敗れて臥薪嘗膽する越王勾踐が、忠臣范蠡に手戦の術を問うたことが見えている。范蠡は越の處女にその術を問うべきむねを奏上し、かくて招聘された處女が謁見に赴く道中、袁公と稱する者が術比べを申し込む。しかし、處女の術にかなわぬと知った袁公は白猿と姿を化して逃げ去る。この話題は『藝文類聚』卷九十五「猿」第四條や『太平廣記』卷四百四十四「白猿」にも摘録される。その一方で、『呂氏春秋』卷九「精通篇」には、楚の共王のときに養由基の神箭の前に觀念して逃げ去った通臂の白猿のことを傳え、これも『藝文類聚』卷九十五「猿」第二條に採録される。實は、この二種の白猿に關する故事を借り來たり、前者における越の處女を九天玄女の化身であった

とし、袁公をその弟子（白雲洞君）として新趣向の情節を案出したのは、明の馮夢龍増補の『平妖傳』四十回本（新本）であった。

かくて第一回の物語が開かれるとともに、白雲洞君に封ぜられた袁公は九天玄女から保管を任されていた九天秘法『如意（寶）冊』を盗みだし、地上の白雲洞の壁面に刻してしまふ。第二回に入ると、玉帝は道家の百八變化の法（三十六天罡大變法・七十二地煞小變法）が地上に漏れることを恐れて、天庫に藏されていた四母の一つ「霧母」を使って白雲洞を霧で覆いつくし、袁公（白猿神）に番をさせるにいたる。「霧母」の來歴についてこう記される。

第四是霧母、（中略）當先軒轅皇帝在位時節、有一箇諸侯最爲無道、名曰蚩尤。他得了這箇霧幙、能致大霧、又創造刀戟大弩、便自恃天下無敵手、鼓衆造反、要奪黃帝的天下、黃帝與蚩尤大戰於涿鹿之野、一軍都被霧氣迷惑、東西不辨、三日三夜、不能取勝、賴得九天玄女下降、授黃帝陰符祕策、造成一車、名指南車。車上站一箇木人、木人伸一隻手、手伸一箇指、隨你車兒左旋右轉。這木人一手一指、準準的對着南方、當下遂破了蚩尤、追而斬之。

（中略）這霧幙是九天玄女收得、獻上玉帝、收藏天庫。

「霧母」は、もともと蚩尤が所有した霧幙であり、涿鹿の野に對戦した黃帝の軍を迷わせたといわく附きの代物であった。この黃帝の危難を救ったのは九天玄女にほかならず、黃帝が蚩尤を破ると、霧幙は九天玄女に沒收されて天庫に收藏されたと傳える。一種の蚩尤の武器ともいべき霧母なり霧幙なりの存在や呼稱は、すでに紹介した關連の文獻資料に確認できない。いわゆる「指南車」も、下降した九天玄女による陰符祕策の傳授をうけて作られ、かくて霧中にありながら方位に迷うことなく戰勝をおさめたごとくであり、すでに見た所傳とは異なる相承であるといわざるを得ない。

以上をはじめとして、『平妖傳』四十回本では、九天玄女と袁公（白猿神）とが物語の展開に實質的に關與する登場人物となっていることは、『水滸傳』における九天玄女の場合と事情が異なるようである。ただ『平妖傳』四十回本にも、九天玄女の信仰のことが見えることも指摘しておかなければならない。第三十八回、貝州で反亂を起こした王則の陣營から術師左癩兒が、討伐軍の文彥博を壓殺すべく礮臼を飛ばすも、九天玄女の部下である多目神に抱きかかえられて事無きを得たことを語るのに續いて、文彥博の九天玄女に對する信仰のことが説き明かされる。文彥博が文官試験に合格する前のこと、

九天玄女娘娘廟で祈りを捧げている間に夢をみた。九天玄女が現れて、「人間の名宰相、天上の老人星」との十文字の神語を文彥博に贈る。これ以後、文彥博は繪師に九天玄女娘娘の聖像を描かせ、毎月朔日にはその軸を開いて燒香し、篤く信心したという。

九天玄女の信仰はひとり宋江だけのものではなかった。その情節は『水滸傳』の宋江のそれから發想を得ているものと考えられるが、この一段には、續いて多目神による救済の因果について説かれる。旅中であつた文彥博は、ある夜、九天玄女の部下で、失敗を犯したために主の怒りに觸れて神刀で顔を刺され、當地に配流に處されていた千里眼（のちの多目神）に出會う。翌日、文彥博は九天玄女の聖像の前で千里眼の罪を許してくれるよう懇願すると、その夜、夢に千里眼が現れて、お陰で免罪になった旨を告げて、他日お目にかかりますとの言葉を殘して姿を消す。その後、文彥博は及第榮進して、出でては將、入りては相となり、ますます九天玄女娘娘を信じて毎月朔日には必ず禮拜して、老齡にいたるまで恭敬の念は衰えず、軍中にあつても信心を怠らなかつたという。

多目神（千里眼）の文彥博への報恩由來を語る趣向で、文彥博の熱心な九天玄女の信心が説かれると同時に、第四十回、九

天玄女は白猿神の懇請に應じて處女の姿に變じ、反亂軍にあって最後の手段として烏龍斬將の法を行わんとする聖姑姑と術比べをして、その菩薩變化の邪術を破って捕縛する。かくて反亂の平定後に、九天玄女の蔭からの援助に感謝して、王則の僞府をその廟に改修したという。

『平妖傳』四十回本にあって、九天玄女は物語の發端から王則の反亂の平定・收束にいたる展開において、缺くべからざる重要な存在となっていることを改めて強調しておく。と同時に、それは『水滸傳』における九天玄女信仰の首尾一貫性を模した同類の構圖をもつにいたっていることを特に記しておくかなければならない。

四

明の陶宗儀の『輟耕錄』卷二十「九姑玄女課」に、吳楚の地で村巫野叟および婦人女子がよく行ったという「九姑課」を傳え、その後、「又一法あり」として「九天玄女課」を載せている。その占いはいかなるものか。

其の法、草を折りて一たび把る。莖の數の多寡を計らず。苟も算籌を用ふるも亦た可なり。兩手 意に隨ひて之を分け、左手は上に在り、豎に放く。右手は下に在り、横

に放く。三を以て之を除き、及ばざる者 卦と爲す。

草を使った占いで、豎方向と横方向において草の本數からそれぞれ三の倍數を減除してゆき、残った本數を卦として占う。草の本數が一豎一横を「太陽」、二豎一横を「靈通」、二豎二横を「老君」、二豎三横を「太吳」、三豎一横を「洪石」、三豎三横を「祥雲」といい、みな吉兆である。一豎二横を「太陰」、一豎三横を「懸崖」、三豎三横を「陰中」といい、みな凶兆である。

『水滸傳』に現れる「九天玄女課」と同名の占卜の記載である。『輟耕錄』には、「愚の意ふに、俗に九姑と謂ふは、豈に即ち九天玄女ならんか。」という。因みに、「九姑課」は、

其の法、草九莖を折り、之を屈して十八と爲し、握りて一束と作す。祝して之を呵し、兩兩相結び、兩端を止留す。已にして抖ひ開き、以て休咎を占ふ。

とある。やはり草を用いた占い法で、二つ折りにした草を結んでゆく。「一條に續成せし者」を「黃龍儻仙」、「二圈を穿つ者」を「仙人上馬」、「圈穿たざる者」を「蟾窠落地」といい、みな吉兆である。「或ひは紛錯して緒無く、分理する可からざれば、則ち凶なり。」という。そもそもこうした占卜の先蹤はあるのか。『輟耕錄』は、「離騷經」(『文選』卷三十二)

の「索瑤茅以筮簿兮、命靈氣爲餘(古之)」の注(王逸注)に、「瑤茅、靈草也。筮、小破竹也。楚人名結草折竹以卜、曰簿。」とあるのに着目して、「此に據れば、則ち亦た本づく所有り。」と考察を加えている。

『水滸傳』の九天玄女課に立ち返ってみれば、その占卜の模様の記事は、いわゆる征遼故事に頻出する。第八十一回に、

宋江大喜、隨即教取紙筆來。一面焚起好香、取出玄女課、望空祈禱、卜得箇上上大吉之兆。

第八十二回にも、

宋江焚起好香、取出九天玄女課來、望空祈禱祝告了、卜得箇上上大吉之兆。

第八十五回にも、

宋江正在薊州作養軍士。聽的遼國有使命至、未審來意吉凶。遂取玄女之課、當下一卜。卜得箇上上之兆。

第八十六回にも、

宋江便取玄女課、焚香占卜已罷、說道：「大象不妨、只是陷在幽陰之處。急切難得出來。」

の如くである。その占卜は、ただ結果としての吉凶のみが問題視されて、占い自體のやり方は明らかにならない。その意味で、名稱的な同一性によらざるを得ないが、『輟耕錄』の記

載は、地方的な限定等の制約が認められるものの、占卜方法の實體を示す一資料として貴重な意味をもつと考える。

これに加えて、名稱的に類似するのは、『宋史』卷二百六「藝文志五」「五行類」に著録された『玄女十課』一巻の書名である。その具體的な内容自體は知られないものの、本書もまた占卜書なのであろう。それらの相互の関連性が想起されることを指摘しておきたい。

ところで、九天玄女の與えた天書には、いかなる内容が伝えられていたか。第五十二回に「回風返火破陣法」、第一百七回に「回風破暗密呪」という實質的には二つの兵術に關わる記載が見えるだけである。少ない事例からではあるけれども、『水滸傳』の九天玄女が與えた天書の内容性は窺われよう。では、『平妖傳』四十回本の場合はどうか。文彦博の九天玄女信仰のことが情節化していることを確認したが、この『平妖傳』という小説の場合、新本四十回に先行して行われていた舊本二十回において、すでに九天玄女に關する情節が定着していたことが知られる。舊本第二回の回目に、

胡永兒大雪買炊餅、聖姑姑傳授玄女法

とあるように、妖術者である聖姑姑が「玄女法」を用い、それを胡永兒に傳授していたことが明らかである。これをはじめ

めとして、舊本第三回の冒頭詩には、

九天玄女好驚人、但恐於中傳不眞。

只爲一時風火性、等閑燒了歲寒心。

とあり、その正文では、

當夜胡永兒看那冊兒、上面寫道、九天玄女法。揭開第一板看時、上面寫道、變錢法。

と説き始める。「那冊兒」はいわゆる術書で、その名は「九天玄女法」と題記される。第一番目に現れる術は、「變錢法」である。あとには「變米法」「飛(藏)形法」「飛行法」といった法術名が擧げられ、襖子に腰掛けた人を飛行させることも書かれている。また紙人紙馬を使う術のことも現れる。

『平妖傳』舊本二十回における「九天玄女法」は、正統的な兵法であるよりは、幻術妖法的な要素が強く、『水滸傳』の天書とは様相が異なる。すなわち、片や『水滸傳』は宋江なる好漢を守護する女神としてプラスの方向に、片や『平妖傳』二十回本は妖術者たちに用いられるにいたった邪術としてマイナスの方向に、それぞれ物語における機能と意味合いは兩極端の方向に分岐しているといわねばならない。加えて『平妖傳』の場合、新本四十回は舊本二十回のマイナス方向の「九天玄女法」に着眼し、九天玄女が袁公に管理させた「如意(寶)

冊」の流出漏洩、そのうち「地煞邪法」(白雲洞の左壁に刻される)を修得した妖術者たちを中心とする王則の反亂、そして袁公に請われた九天玄女の助勢を得ての反亂鎮定という一連の情節を新生したのである。もちろん征討軍の文彦博の九天玄女信仰を描いたのは、新本四十回の特有の設定であった。このような新規の筋立てのもと、新本四十回には、先の術に加えて、三十七回には「換形法」、第三十八回には「白馬迷軍之法」、第三十九回には「禁人法」「隱身法」、ならびに「如意(寶)冊」中の「至惡の術」という「烏龍斬將法」が新たに描き出されている。⁽¹⁾「九天玄女法」の「天罡正法」(白雲洞の右壁に刻される)は傳わらず「地煞邪法」のみが流出したと設定するだけ、より妖術邪法性が増大伸張していたことが明白になる。と同時に、新本四十回は九天玄女なる神女無くしては成り立たない章回小説として再生躍如したといえることができる。

五

最後に、新生した『平妖傳』四十回本の影響下にある清・呂熊の『女仙外史』に注目しておきたい。『平妖傳』が宋の慶曆七年(一〇四七)河北の貝州に發動した王則の反亂を敷衍するのに對して、『女仙外史』は世に「靖難の役」と呼稱される

明の建文元年（一二九九）に起きた歴史的事變を題材とするが、そこに永樂十八年（一四二〇）のことと山東の地で唐賽兒によって指導された農民反亂のことを絡めている。

小説名にいう「女仙」とは唐賽兒を指し、彼女は月殿の嫦娥が降世したものと設定するとともに、九天玄女が唐賽兒に天書を授ける。第八回「九天玄女教天書七卷、太清道祖賜丹藥三丸」において、唐賽兒と妙姑が四月初九日の子の刻、南に向かつて端座し、地に伏して叩首するなか、やがて九天玄女が姿を現す。

遙見彩雲萬道、從海上飛來、隱隱仙樂鏗鏘、儀前導已至、霓旌翠蓋、絳節朱、回旋星月之間、不知其數。俄而兩行肅然列開、玄女娘娘乘紫鳳凰、衆仙女或乘朱雀、或踏紅皂、或御黃鶴、或跨素鵝。前兩個、一執龍鬚弘、一捧瑤光劍、後兩個、各執一柄九彩鸞羽扇、冉冉下于空中。

玄女は事前に與えおいた天書七卷の由來を説いている。それは道家の天書三笈であり、小説中に説明される順序によって示せば、下笈は六丁六甲、奇門遁術、布陣行軍の祕法、中笈は天罡地煞、騰挪變化、一百八種の奇奧の術。上笈は、第一卷が「追日逐月、換斗移星、遣召雷霆神將之法」、第二卷が「倒海移山、驅林鞭石、役使地祇之法」、第三卷が「蕩魔誅怪、

伏虎降龍」、第四卷が「踏江海、穿金石」、第五卷が「縮天地于壺中、收山河于針杪」、第六卷が「掌上山川、空中樓閣」、第七卷が「變化世間一切有情有形之物」で、その玄妙は五行を消滅し、萬劫を超脱することができる。南海大土が上帝に口添えしてくれたため、上笈を賜るといふ。

この天書傳授の情節は嚴かにすぎず、『水滸傳』流の夢中の邂逅と傳授のありようとは形態も雰圍氣も異なる。加えて、『女仙外史』には『平妖傳』四十回本に由來すると思われる類似的趣向が少なくない。例えば、靈猴に玄女道院の門番を擔わせるところや、唐賽兒の正體は蒲臺縣の妖狐が變化したもので、邪教を傳えて庶民を惑亂しているとの風聞を書いているところなど、『平妖傳』四十回本における九天玄女・白猿神・妖狐という登場人物の枠組みを借用奪胎していることは明白である。蓋し、『水滸傳』に流れを發する九天玄女にまつわる情節は、小説の流行や受容と相俟ってその餘響甚だしく、『平妖傳』『女仙外史』という明清の長篇小説の世界に連綿と受け継がれたといえる。あるいは、白話短篇小説の世界にあっても、いわゆる三言二拍のひとつ『警世通言』の第四十卷「旌陽宮鐵樹鎮妖」に九天玄女の姿を見るし、同じく第三十四卷「王嬌鸞百年長恨」には嬌鸞の作「古風」一首の中に「九天玄

女相傳遍」と詠じられてもいる。また清・袁枚『子不語』巻八「九天玄女」には、夢の中で立身する前の周少司空が九天玄女に招かれ、小女のために詩を題せんことを所望される話が収載されることも書き添えておきたい。

九天玄女なる女神は、黄帝と蚩尤の一大鬪争説話に出現するとともに、以上述べてきた如く、通俗小説の世界で格別に伸張流行してきた神格であったことを忘れてはならない。篤い信仰にささえられた夢現夢應の神明、その神祕は民衆の心に深く息づいてきたといえる。

注

- (1) 兵書類以外の書名も示しておきたい。『宋史』巻二百六「藝文志五」には、「天文類」に『占風九天玄女經』一卷、「五行類」に『玄女金石玄悟術』三卷・『玄女玉函龜經』三卷・『玄女五兆筮經』五卷・袁天綱(二作「孫思邈」)『九天玄女墜金法』一卷・『玄女三廉射覆經』一卷・『玄女常手經』二卷・『玄女遁甲秘訣』一卷・『玄女式鑑』一卷・『玄女關格經』一卷(六壬占驗之訣・玉樞真人)『玄女截壬課訣』一卷・『玄女簡要清華經』三卷・『玄女墓龍冢山年月』一卷・『玄女星羅寶圖訣』一卷・『玄女十課』一卷・『玄女斷卦訣』一卷・『九天玄女訣』一卷が著録される。
- (2) その他に、『隋書』「經籍志三」には、『黄帝蚩尤風后行軍秘術』・『黄帝蚩尤兵法』・『黄帝用兵法訣』といった黄帝と蚩尤の

九天玄女考(堀)

鬪争、ひいては九天玄女の登場を暗示する書の存在することをも附記したい。

- (3) 引用した『黄帝玄女戦法』のほかに、『藝文類聚』巻十一「帝王部一」「黄帝軒轅氏」所引の『龍魚河圖』には、「黄帝時、有蚩尤。兄弟八十一人、竝獸身人語、銅頭鐵額、食沙石子。造立兵杖、刀戟大弩、威振天下、誅殺無道、不仁慈。萬民欲令黃帝行天下事、黃帝仁義、不能禁蚩尤。黃帝仰天而嘆、天遣玄女下、授黃帝兵信神符、制伏蚩尤。(下略)」と傳えるけれども、霧のことは記されていない。
- (4) 『山海經』「西次三經」や「大荒西經」の記載による。
- (5) 蚩尤については、「蚩尤の血一流血の相承」(『學術研究』第四十四號、一九九六年二月刊)に論じている。
- (6) 「指南車」については、『太平御覽』巻十五「天部十五」「霧」所引の『志林』に、「黃帝與蚩尤戰於涿鹿之野、蚩尤作大霧彌三日、軍人皆惑。黃帝乃令風后法斗機作指南車、以別四方、遂擒蚩尤。」との記載もある。
- (7) 「中公新書」、一九七二年八月刊。のち「中公文庫」、一九九三年十二月刊。また「宮崎市定全集」第十二卷(一九九二年二月、岩波書店刊)所收。
- (8) 『舊唐書』巻百八十二「高駘」傳に附された畢師鐸の傳、ならびに『新唐書』巻二百二十四下「高駘」傳における光啓三年四月の記載によれば、高駘に召された呂用之の言った「(略)苟不聽、徒勞玄女一符耳。」あるいは「(略)不爾、煩玄女一符耳。」の言辭が記されている。

(9) 「后土廟」と題する七言律詩の頷聯に、「九天玄女猶無聖、后土夫人豈有靈」の句、『甲乙集』卷二所載、『全唐詩』には詩題を「春日獨游禪智寺」に作る）がある。

(10) その他、唐・孟郊「獻漢南樸尙書」詩の第三聯に「陽光潛埃塵、心開玄女符」、同じく劉禹錫「和董庶中古散調詞贈尹果毅」詩の第四聯に「讀得玄女符、生當事邊時」とも詠まれている。また、櫻庭和典「九天玄女」(『道教事典』項目、一九九四年三月、平河出版社刊)には、臺灣に七つ餘りの廟があり、線香業者や道士に守られていることを記している。

(11) この方面に關しては、かつて『平妖傳』に見える『水滸傳』の影—馮夢龍による増補改作をめぐって—(『中國文學研究』第八期、一九八二年十二月刊)に論じたことがある。

(12) 「烏龍嶺斬將法」は、『水滸傳』の方臘征伐の情節に出てくる「烏龍嶺」あるいは「烏龍廟」との脈絡があるうか。

〔付記〕本稿は、一九九七年度早稻田大學特定課題研究(個人研究)の成果の一部である。